

平成21年6月20日現在

研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：平成19年度～20年度  
 課題番号：19592599  
 研究課題名(和文) 簡易問診票による「うつ」症状のスクリーニングの有効性に関する産業看護学的研究  
 研究課題名(英文) An occupational nursing study on efficiency of screening for depressive state using a brief questionnaire  
 研究代表者 影山隆之  
 所属(職) 大分県立看護科学大学 看護学部 教授  
 研究者番号 90204346

## 研究成果の概要：

DSS(the Depression and Suicide Screen)を含む「心の健康度自己評価表」を、うつ状態にある勤労者をスクリーニングする目的で職域において使用した場合の、集団全体の成績、スクリーニングの効率、および既に職域で広く使われている職業性ストレス簡易調査票の成績との関連について検討した。

在宅高齢者についての先行報告と比べると、DSS 各項目とも陽性率が高く、集団全体としてのDSS得点は高めになり、原法に従って一次スクリーニングを行った場合の陽性率は5割を超えた。陽性群に1カ月以内に二次面接を行い、構造化面接により抑うつ症状・希死念慮等を評価して精神科的医療の要否を検討したところ、171人中25人(14.6%)が要精神科医療と判断され、それ以外は偽陽性と考えられた。両方で性別・年齢には差がなかった。二次面接不要群、偽陽性群、要医療群の三者で、職業性ストレス簡易調査票の成績を比較すると、精神的健康レベルは二次面接不要群>偽陽性群>要医療群であった。

以上から、住民基本健診での先行報告に比べると職場ではDSS得点が高めになり、偽陽性率が相当高くなることが確かめられ、スクリーニング効率としては課題が残った。職業性ストレス簡易調査票をすでに用いている職場では、DSS または心の健康度自己評価表を新たに導入する意義は低いと考えられた。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
19年度	500	150	650
20年度	500	150	650
年度			
年度			
年度			
総計	1,000	300	1,300

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学 地域・老年看護学

キーワード：

### 1. 研究開始当初の背景

日本では中高年男性の自殺が依然として大きな健康問題であり、対策の一方法として職域では、定期健康診断等の機会にストレスや精神健康状態に関する問診を行ってハイリスク者をスクリーニングすることが試みられている。そのために既に何種類かの問診票が用いられているが、長時間残業者に医師が面接を行う際の「過重労働者面接マニュアル」では新しい問診票としてDSS(The Depression and Suicide Screen)を推奨している。

DSSは質問項目が少なく簡便ではあるが、元来は地域精神保健活動の場で主に高齢者を対象として開発されたものであることから、これを職域で用いるには基礎的資料の整備が必要である。例えば、DSSを抑うつ状態のスクリーニングに用いた場合、職域では地域高齢者よりも陽性率が高率になるとの報告があり、二次面接に相当の時間・マンパワーを要する可能性がある。また、これまでも職場環境要因（仕事の負荷、裁量度、上司や同僚の支援など）と勤労者の精神健康との関連は報告されているが、後者をDSSで評価した場合にも同様の関連が見られるかどうかは未確認である。DSSでハイリスクに見える勤労者の精神健康状態が実態としてどうなのか、精神科等の受診を勧奨すべき人はどれくらい含まれるのか、その職場環境はどのような状況なのか、等について検証しなければ、DSSを産業保健師等が活用することは困難である。

### 2. 研究の目的

本研究では、DSSを核とした心の健康度自己評価表（厚労省「うつ対策マニュアル」）を職域精神保健の場面で保健師等が活用しようとした場合に必要となる上記情報を得るために、研究代表者らがこれまで関わってきた職場をフィールドとしてデータの収集と解析を行った。

本研究では、研究期間（2年間）に次の知見を得ることを目標とした。

- (1) 職域の定期健康診断において、自記式問診票としてDSSを使用した場合の、「うつ」陽性率を調べる。
- (2) これらの「陽性」者に対し、研究者および産業保健師による二次面接を行い、該

当者の精神科医療の要否、精神科受診勧奨の要否（＝すでに加療中であれば不要）、保健指導の要否、職場環境調整の要否、注意深い経過観察の要否など、複数の観点から評価を行って、観点毎にDSSによるスクリーニングの有効性を検討する。

- (3) 定期健康診断の問診に組み込んだ「職業性ストレス簡易調査票」のうち、受診者の精神健康状態に関連する自覚症状と、DSSの成績との関連について検討し、この面からDSSの妥当性を検証する。また、同じ「職業性ストレス簡易調査票」で評価した職場環境、および前年度の「職業性ストレス簡易調査票」の結果と、DSSの成績との関連について多変量的解析を行い、DSSで評価した「うつ」傾向と職業性ストレスとの関連を明らかにする。

### 3. 研究の方法

研究1では、ある工場の従業員で定期健康診断を受診した1,795名に、DSSを含む心の健康度自己評価表と職業性ストレス簡易調査票を含む問診票を配布回収した。DSS5項目は「はい」「いいえ」の2件法で回答するので、それぞれ抑うつの回答を陽性と呼ぶことにして各1点を与え、合計点を求めてDSS得点とした。原法に従い、DSS得点が2点以上、または希死念慮に関する2問のいずれかに陽性の場合を「抑うつ状態の疑いがあり二次面接を要する」群つまり陽性群と呼ぶことにした。ストレスを感じるライフイベントがあると回答した人を陽性群に追加した場合についても、合わせて検討した。各問の陽性率およびDSS得点の分布を求め、またDSS得点と職業性ストレス簡易調査票の各尺度との相関係数を求めた。

研究2では、ホワイトカラー主体の2つの職場の定期健康診断受診者549名に同様の質問紙を配布回収した。1カ月以内に職域保健

師が陽性者を呼び出し、二次面接で構造化面接 CIDI-SF を実施して抑うつ症状・希死念慮の有無を評価するとともに、精神科医療等の支援の要否を検討した。全対象者を、二次面接不要群、陽性群だが二次面接に来談しなかった群、来談したが支援不要と判断された偽陽性群、要医療群に分け、職業性ストレス簡易調査票の成績を比較した。

#### 4. 研究成果

研究1では、DSS5項目とも陽性率が3割前後、DSS得点は平均1.79で、要二次面接とされる基準に該当した陽性群の割合が53%（ライフイベントありを加えると59%）になった。これらはすべて、高齢者の場合よりはるかに高い値であった。つまり、DSSの原法を機械的に適用すると、半数の勤労者に二次面接などを行って精神的現在状態を確かめる必要があることがわかった。DSS得点と性・年齢との関連はほとんどなかった。

また、DSS得点と職業性ストレス簡易調査票のストレイン得点との相関は中程度にとどまり、抑うつ度得点との相関係数も0.547にとどまった。職業性ストレス簡易調査票の抑うつ度得点を基準とすれば、勤労者におけるDSS得点の妥当性はそれほど高くないようであった。DSS得点と職業性ストレス簡易調査票のうち仕事の負荷に関連する尺度との相関も低く、DSS得点から仕事の量・質的負担感が強い人を見出すことは困難であることが示された。以上は、過重労働者の抑うつ度を評価して一次スクリーニングを行う、という目的でDSSを使用することに、疑問を抱かせる結果であった。

研究2では、やはりDSSによる陽性率は59%で、研究1の結果を裏付けた。陽性群のうち二次面接に来談しなかった群(28%)と来談群(31%)の間で、職業性ストレス簡易調査票の成績に大きな差はなかった。二次面接の結果、

来談者の14.6%（全対象者の3.5%）が要医療群と判断され、つまり偽陽性群が多数いたことがわかった。

一次スクリーニングの時点での職業性ストレス調査票の成績を比較すると、精神的健康レベルは二次面接不要群>偽陽性群>要医療群で、偽陽性群の精神健康はそれなりに憂慮される状態であったこともわかった。要医療群では、仕事の負荷よりもコントロール度や達成感の面で特徴があることが示唆された。また、本人への受療勧奨以外に、家族のための高齢者福祉相談や教育相談など医療以外の支援が必要な事例もみられ、必要な支援は精神科医療だけでないことも示唆された。

以上から、こころの健康度自己評価票(DSS)は簡便な問診票ではあるが、職場健診で一次スクリーニングのツールとして用いた場合には陽性率が5割にも達し、二次面接に相当の時間とマンパワーを要することと、ただちに要医療とは言えない偽陽性群が多くなることがわかった。これは、長時間労働者への面接などで事前情報を得る際に、留意しなければならない点である。

今回のデータでは、既に多くの職場に普及している職業性ストレス簡易調査票によっても、こころの健康度自己評価票(DSS)と同等またはより効率的なスクリーニングをできる可能性が示唆された。少なくとも、既に職業性ストレス簡易調査票を活用している職場にあつては、こころの健康度自己評価票(DSS)を追加導入する意義は高くないと結論された。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計4件)

1) 影山隆之, 小林敏生: 職場の定期健診における簡易質問紙DSS高得点者への構造化面接の試み; 希死念慮や抑うつ状態のスクリーニングは可能か? 産業衛生学雑誌, 49(Suppl), 779, 2007 April, 大阪.

2) 影山隆之: 希死念慮や抑うつ状態を有する勤労者を健康診断でスクリーニングする試み(第2報): DSSの特性および職場ストレスとの関連. 第27回日本社会精神医学会抄録集, 125, 2008 March, 福岡.

3) 影山隆之, 小林敏生: 職場の定期健診における簡易質問紙DSS高得点者への構造化面接の試み(第2報); DSSと職場ストレスとの関連. 産業衛生学雑誌, 50(Suppl), 515, 2008 June, 札幌.

4) 影山隆之: 抑うつ状態・希死念慮の評価ツールDSSを一般勤労者に適用した場合の基礎データ. 第28回日本社会精神医学会抄録集, 108, 宇都宮市.

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

影山 隆之(KAGEYAMA TAKAYUKI)  
大分県立看護科学大学・看護学部・教授  
研究者番号: 90204346

### (2)研究分担者

小林 敏生(KOBAYSHI TOSHIO)  
広島大学大学院・医学系研究科・教授  
研究者番号: 20251069

### (3)連携研究者